

TV Man Union News

テレビマンユニオンニュース December 1 2007 No. 596

作家 小田 実の「終わらない旅」

坂元 良江

作家小田実さんが2007年7月30日亡くなった。

「何でも見てやろう」で一世を風靡し、ベ平連の代表としてベトナム反戦運動の先頭に立ち、阪神淡路大震災後には史上初めての市民からの提起による法律「被災者生活支援法」を成立させた。活動の発想、方法はいつも斬新でユニークだった。そのため、小田実さんは作家としてよりは運動家、活動家として知られることのほうが多く行動する作家といわれていた。しかし、彼の作家としての仕事は膨大であり、その多くは全体小説と小田さん自身が言うところのスケールが大きい。「作家だから、やむにまれない気持ちになったときには行動するのだ」と小田さんは常に言った。ご自身の生涯を作品にしたともいえる小説「終わらない旅」が最後の文学作品となった。

同時代を生きた者として、テレビのプロデューサーとして小田実さんの番組をいくつも制作してきた者として、そして最後に病床での撮影をさせていただいた者として、作家小田実を語らせていただこうと思う。選んだ作品と時代はあくまでも私の個人的な思いによるものであり、多面体のような小田実さんをトータルに伝えることも許することも到底出来ない。

「では、生きているかぎり、お元気で」

小田実さんが余命数ヶ月の末期がんであることを、私は元ベ平連事務局長吉川勇一さんの電話で知った。4月中旬だった。ご家族との大切な時間だろう、執筆時間を削る



ベ平連 デモ 1972年

ことになるだろうと思いつつも、ご自宅にいらつしやるうちに会いたい、ただそれだけの気持ちで電話をした。「一時間くらいならいいよ、来なさい」とのお返事をいただき西宮のご自宅をお訪ねしたのは4月20日だった。すでに書きあがっていた友人、知人200人への手紙を見せていただいた。

手紙は、4月上旬に帰国したヨーロッパ旅行の報告と、ご自分が末期がんであることを書き「短いあいだですが、デモ行進に出ることも、集会でしゃべることももうありませんが、書くことはできるかぎり、書きつけて行きたいと考えています。ではおたが

いに、奇妙な言い方かもしれませんが、生きているかぎりお元気で。」と結んであった。小田さんは私に、これから撮影をすることを提案された。言い遺すことがたくさんあるのだとのことだった。5月連休の最中に最初の撮影に伺った。「今の世の中ね、私が憂いているのは、明日は憲法記念日だけど、『美しい国』づくりになぜ憲法が邪魔なのか、憲法をかなえなければいけないのか、みなが問題にしない限りね、改憲は着々と進行するのではないのでしょうか……」と語り始め撮影は1時間の約束が2時間にもおよんだ。

小田さんが強く訴えたのは、日本は平和主義に基づいて産業構造を作ってきた。軍需産業中心ではなく、平和産業だけでこれほどの繁栄を築いた。そんな国は日本しかない、繁栄の一番肝心なところは生活基盤、経済基盤としての中流を作ったということ、そのことを忘れてはいけない、というものだった。憲法を守る「9条の会」に積極的に参加し、発言していた小田さんの最後の言葉は、「憲法を守ることによって日本が価値ある国であり続けよう」。とくに若いひとたちに「日本はあかん」ではなく価値ある国であることを知って欲しいと訴えた。

「何でも見てやろう」で

若者たちは世界に出ていった

「ひとつ、アメリカへ行ってやろう、と私は思った。3年前の秋のことである。理由はしごく簡単であった。私はアメリカが見たくなつたのである。」で始まる世界放浪の旅日記

「何でも見てやろう」(河出書房新社、講談社文庫)が世に出たのは1961年春のことだった。小田さんはフルブライト留学生としてハーバード大学にいた期間も含め2年間の旅を終え、1960年初夏、「60年安保闘争」が敗北に終わったばかりの日本に帰国した。1ドル360円、旅行者は外貨500ドルしか持ち出せない時代だった。留学は奨学金をもらって行く優秀な学生か、特別な階級の子弟にだけ許されることだった。英語は不得意だったとはいえ既に2冊の小説を出版しており、東大で古代ギリシア文学を専攻する学生だった小田さんは持ち前の押しの強さで留学生試験に合格してアメリカへ出発した。

当時はおおかたの留学生たちは留学期間が終わると帰国し、大学や企業で留学の成果をいかしたり、一流の芸術家を目指す道を選ぶことが多かった。しかし、小田さんが世に出したのは、まるで地を這うような貧乏旅行の記録だった。旅で知り合って友だちになった人たちの家に転がり込み、時には街路で乞食のとなりで眠り、ユースホテルで世界中から集まってくる若者たちとしゃべりといった旅を1年もしたのだ。

小田さんは、物事は「鳥の目」ではなく「虫の目」で見なければダメだと常に言った。ヨーロッパの国々で、中東の諸国で、アジアの各地で小田さんが一流の作家や知識人たちと会って論じることができたのは彼がフルブライト留学生であり東大の大学院生だったからには違いない。しかし知識人氏が「ハダシとボロの召使いがいる家」に帰った後、小田さんは粗末な食事を街頭に座

って食べ、夜は寝る場所に困った。ポケットのわずかな現金を日本に帰りつくまでもたせなければならぬ。

貧困の真つ中において小田さんは自問自答する。「もうこれはタマラン、ぜがひでも、何がなんでも、ここから逃げ出したい気持ち、いや激しい欲望であった。私はなんという卑怯者だろう。ベンガルのえらい詩人とアジアの『貧困』を論じたとき、私はあんなにも雄弁であつたではないか。それがいざ貧困に直面すると、目を向けるどころか、背を向けて一日散に逃げ出そうとする」と逃げ出そうとすれば、いつでも逃げ出せる自分を問うたのである。ものごとを外から見るのと内から見るのとの違いを身にしみて感じる体験だった。小田さんの「虫の目」で見る習慣はまさにこの旅で得たものだっただろう。

「何でも見てやろう」はベストセラー第一位を長く続け、若者たちの目を世界へと向けさせた。普通の人間が世界中の普通の人々と対等になれるのだという今では当たり前のことを学び、彼らの目の前には明るい未来が開けたのだ。そして、若者たちは世界へと出て行った。



「何でも見てやろう」で一躍人気作家に

ベ平連「ひとりでもやる、ひとりでもやる」

「何でも見てやろう」の翌年小田さんは小説「アメリカ」を書く。哲学者鶴見俊輔さんからベトナム反戦をやらないかと電話があつたのは1965年2月アメリカが「北爆」を開始した直後だった。「私もそう思っていたからやるか」と即答した」と小田さんは言う。ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)の始まりだった。小田さんが小説「アメリカ」にも書いたアメリカ文明に対する鋭い批評精神が、ベトナム戦争に反対する市民運動につながっていったのだ。

政治学者高島卓敏さんと鶴見さん、小田さん3人が新橋のフルツッパラーで話し合い、グループの名前を付け、「デモでもやるか」ということになり4月23日に清水谷公園に集まってデモ行進をやった。1500人が集まったという。

政党、労働組合、大学の自治会やセクトといわれたグループ、文化団体、それらの組織に属さない人々がベトナム戦争に反対する場がベ平連だった。月1回清水谷公園へ行けばだれでも、ひとりでも参加できるのがベ平連のデモだった。となりは知らない人だった。名刺の交換もなかった。小田さんが哲学者久野収さんの追悼文に彼との出会いを書いている。「幸いにして(私はこのことばに無限のガンチクを込める)、私が久野さんと知己になったのは、大学の教室においてではないし、本を読んで『ファン』になった上のことでもない、ベトナム反戦運動

のデモ行進のなかでのことだ」とデモ行進のなかで付き合いを深めていった久野収さんとの出会いをことのほか大切に意味あるものであることを語っている。

全共闘の学生たちがヘルメットを被り、タオルを口にいましてジグザグデモをして機動隊とぶつかるのを見ながら、ジグザグデモはせずに花束を配るベ平連のデモは軟弱な改良主義の運動だと若者たちに批判される対象でもあった。しかし、「この戦争はおかしいと反対するのに『左翼』である必要はないし、高邁な思想もいらない」という今になればごく当たり前とも思える主張は当時新鮮で普通の市民が集まり、普通の市民が主役だった。

ベ平連の表の三原則はベトナム反戦のスローガンだがそれとは別に「やりたいことをやる」「言い出したものがやる」「人のやることに文句をつけない。いやなら自分でやれ」だった。ベ平連には「中央」「本部」もなかった。全国に無数のベ平連が生まれた。頭に地名や大学名などつけられればそれでよかった。ベ平連を名乗る運動は全国で400に近か



作家・予備校教師・ベ平連代表時代の小田さん

ったという。小田さんが「ひとりでもやる、ひとりでもやめる」(筑摩書房)と題した本を書いたのは25年後の2000年のことだ。ベ平連のことを書いた本ではない。しかし、小田さんが最後まで言い続けたこのポリシーはまさにベ平連のものであった。

脱走兵がやってきた

1967年11月13日、新聞、テレビが、横須賀に寄港中のアメリカの航空母艦イントレピッド号から4人の米兵が脱走し、ベ平連が助けて第三国へ保護を求め出国させたことを大きく報じた。その後、1971年までにベ平連は20名の脱走兵を国外に出している。公表されたもの、未だ公表されていないもの、途中で逮捕され拷問を受けたもの、と様々だ。

「私の心の眼に、世界の行きどまりのようなのがありありと見えて来るときがある。それは、脱走兵——ベトナム戦争から脱走してきたアメリカの脱走兵とともにいるときである。(中略)実際の彼らは、たとえば、彼らをかくまってくれている日本人の家族といっしょに、どこかの団地サイズの家のお茶の間でテレビを見ていたりして、そこはくらやみでもなければ崖つぶちでもないのだが、それにしても私がそんな気になるのはどうしてだろう。すくなくとも、そうしたふうなこわさ、不安、たよりなげさ、孤独、さびしさ、心細さを私は感じるのである。」(「脱走兵の思想」徳間書店)

当時、団地のお茶の間で脱走兵にご飯を食べさせる主婦だった私は、職場で信頼で

きると思える友人たちに「来週から脱走兵あずかつてもらえないかしら」と声をかけ、「手配師」役を引き受けていた同僚は「明日脱走兵が移動するのだけはお前の車で運んでもらえないか?」となかば強制的に後輩に頼み、若い女性社員は「脱走兵援助の活動資金をカンパしていただけますか」と職場で集金してまわる。そんなことが当時働いていた会社の中で起こっていた。貰った地図を頼りに夜陰にまぎれて脱走兵を運んで行く、そこは直属上司の家で「なんだお前か」となることもあった。今もいっしょに働くディレクターは当時では珍しく車をもっていたために「脱走兵運搬役」を引き受けていたが、それよりも沖繩へ仕事で行くときに「脱走を呼びかけるビラ」の運搬を頼まれたときが一番緊張したという。沖繩がまだ復旧をする前のことで、そこは「アメリカ」だった。

当時社員数1500人ほどの会社で200人をこえる人たちが何らかの形で脱走兵援助活動に協力していた。放送局で、大学の教職員たちで、演劇グループで、医師の団体で、地域の市民グループで、地方の農場で脱走兵たちは匿われ、国外へと送られていった。週刊誌は「脱走兵は人民の海の中に」と書き、活動に参加している人々にはある種の高揚感もあった。

「私は彼らと接していて、アメリカ合衆国の自由と民主主義の最上部分に触れた気持ちをもった。同時にまた、私は彼らを家にかくまい、さまざまに助けた日本の無名のチマタの市民に接して戦後日本の『絶対』平

和主義』を体験した、その意味での『表現平和主義』の最上の部分に触れた」(「被災の思想 難死の思想 朝日新聞社」と小田さんは後に書く。

しかし、団地のお茶の間を突き抜けるとその向こうにはまったく誰も知らない空間が始まる恐怖を当時小田さんは一人で感じていた。「強い風が吹きつけて来ても、ひとりひとり、まともにぶちあたるより仕方がない。脱走兵といっしょにいと、国家権力の圧力のまえにひとりでも出立に立っているような気がする。」と小田さんは書いていた。脱走兵たちの孤独と不安、恐怖を自分自身にも感じていたのだ。ベ平連の代表という立場にあった彼の心情を、当時活動に参加している人々も十分に理解しているとはいえなかった。

ベトナム戦争を「ひとりでもやめる」そのことを「ひとりでもやる」兵士を支援する運動はまさにベ平連の運動だった。ベトナムと平和の協定「パリ協定」が1973年に成立した翌年、ベ平連は解散した。小田さんは解散集会に出席していない。次ぎなる「ひ



40年ぶりに帰って来た元脱走兵と

とりでもやる」へむけて世界を旅していた。

二つの難死体験

8月14日と1月17日、小田さんは必ず集会を開いてきた。小田さんが体験した二つの「難死」を記憶し、次なる行動をするためだ。「難死」という言葉は小田さんの造語で彼の発言には必ずこの言葉が登場する。

1945年8月14日大阪で大空襲があつた。百数十機のB29爆撃機から大きな破壊力を持つ1トン爆弾が落とされ、今は大阪城公園となつている砲兵工廠が破壊された。周辺の民家にも容赦なく爆弾は落下した。第2次世界大戦が終わる20時間前のことだった。小田さんの家はまさにこの周辺にあつた。庭に家族が手で掘った粗末な防空壕の中で恐怖の数時間を過ごし、空襲が終わったあとようやく外に這い出た小田さんは、地上に落ちていたビラを拾う。「お国の政府は降伏して、戦争は終わりました」と書かれていた。B29から爆弾と一緒に落とされた「伝單」と呼ばれたものだ。

「考えてみると、この大阪空襲がごく小さな空襲を除けば、太平洋・アジア戦争のみならず第二次世界大戦最後の戦場であつたことになります。その最後の戦場で、少なからぬ数の人びとが死にました。いや、殺されました。敗戦の次の日、私はこの第二次世界大戦最後の戦場のすぐそばの国鉄の駅での死体処理の現場に行き合わせました。駅もまた1トン爆弾の直撃を受けて破壊されたのですが、そこでの死体の姿はまちがいにこんなふうに「人間は殺さ

れてはならない』ものでした。(中略) 国鉄の駅で彼らが殺されたときは、もうまちがいに彼らの国の政府は降伏して、戦争は終わっていたのです。彼らの死は、たとえ戦争目的が正しかったとしても、まったく無意味な死——まさに『難死』でした。』(『でもくらていあ』筑摩書房)

広島、長崎のあと政府は中立国スイスを通じて『ポツダム宣言』を受諾する用意のあることを連合国側に伝えていた。アメリカは大規模な空襲は中止し、3日間日本の空に平和が戻っていた。しかし、正式受諾の条件として『国体の護持』すなわち天皇制の護持を求めている。一方、8月11日のニューヨークタイムスにはニューヨーク、パリ、ロンドンで『日本降伏』のニュースに熱狂する市民たちの姿と、あわせて『エンペラー・リメイン』(天皇存続)がすでに報道されていたことを私たちは後になって知るのだ。小田さんと一緒に取材でニューヨークへ行き、その新聞の現物を手に入れて見たときの戦慄を私は忘れない。(『わが友アメリカと語る小田実の戦後50年』NHKBS2)



小田さんとたくさん旅をした。平塚 大同江で

『天皇の命をい』交渉に手間取っているあいだに空襲が再開され、最後の止めを刺すかたちで行われた大阪大空襲で多くの人が死んだ。人びとの『難死』を身近に体験したことがその後反戦運動に関わり続ける小田さんの原点となった。小田さんは13歳の経験だった。

50年後の1995年1月17日早朝、阪神淡路大震災が起り西宮に住む小田さん自身は九死に一生を得たが、もう一度『難死』と隣り合わせの体験を持つことになる。『5千数百人が悲惨、無意味、一方的に殺されて死に、あと1年のあいだに行政の無為無策によって、いや、逆にそのあからさまな『棄民』政策によって多数の自殺者をふくんで『関連死』と呼ばれる、これもまたあきらかに『難死』である、そうみなされるべき死をとげたのが8百余人——すべてをふくめて6千3百余人がこれまでに『難死』しています』(『でもくらていあ』筑摩書房)

地震の翌々日にまだまだ多くの人が瓦礫のなかで生き埋めになっているさなかに『もうこれからは人命救助より復興だ』と県知事は言う。物議をかもし、震災は、強力、巨大な自然破壊の乱開発が引き金となった大災害であるとの認識もなくこれを好機と再開発を進める行政に怒り、小田さんは震災1周年に被災した地元の仲間と被災地の『棄民』の生活基盤回復のための『緊急・要求声明』を発表する。それは市民発議による『市民立法』として『大災害による被災者の生活基盤の回復と住宅の再建等を促進するための公的援助法案(略称 生活再建援助法案)』の提起へとつながって行く。



震災 市民立法活動

「される」側に立つ、

そして「小さな人間」のやること

かつての「殺される」側にいての戦争体験——『難死』体験と、震災で『棄民』された人々の『難死』、二つの『難死』体験を重ねあわせ、小田さんは「人間は殺されてはならない」「される」側の人間、すなわち市民の立場に徹して事態を見ること、考えることが必要であるという続けた。

大震災の被災で市民が政治によって『棄民』され、被災した市民が生活を再建するために公的援助がいかに必要であるかを痛感してつくった生活再建援助法案は『市民が市民自らの問題として論議を活発に行い、さらによいものを作り上げ、政党の別を問わず、立法院、行政府に働きかけこの『市民発議』による『市民立法』の実現を図りたいと考えています』(『でもくらていあ』というものだった。

超党派の議員たちに『市民立法』実現に協力を求めた文書を送ったのは1996年6月だった。小田さんは関西の仲間と一緒

に頻繁に国会へ通い、議員たちを説得し、座り込みをし、デモをし、署名を集め、街頭演説をし、長い時間をかけ、超党派の議員たちと一緒に『市民・議員立法 生活再建援助法案』を国会に提出、1998年、憲政史上初めての市民発議の法律が成立した。その後起こった災害の被災者たちはこの法律にどれだけ助けられたことか。その後も改正が重ねられ今年11月には、当初から個人財産の保護はできないとの理由で受け入れられず懸案だった住宅本体への援助も認められるよう法律が改正されることとなった。今年1月以降に起こった石川県能登半島地震、新潟県中越沖地震にも適用される。しかし、その法律は誰がどのような経緯で作り上げたものであるかにもう関心を持つメディアはない。



病室で執筆中の小田さん

「される」側の、小田さんの言葉でいえば『小さな人間』が「する」側である『大きな人間』を動かした『小さな人間の世直し』そのものだった。小田さんがここ数年よく『小さな人間』という言葉を使っている。「小田の中には群集の声がある」と長年の同志、哲

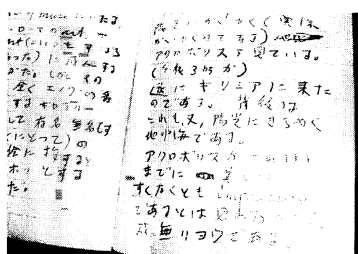
学者の鶴見俊輔さんが最近のインタビューで語ったのも同じような意味だろう。

「私が長年考えてきて、いろいろなことをやってみて、ひとつの結論はこうです。『大きな人間』という存在が、その大きな力を使って政治や経済、文化の中心をかたちづくる。個人の問題としても、制度の問題としても、必ずしもいいものをつくりだすとは限らない。めちやくちやするということが必要になってくる。それに対して『小さな人間』が、デモス・クラトス、自分たちの小さな力を信じて、反対する、抗議する、あるいはやり直しをさせる、是正する、あるいは変更する、変革する。それが『小さな人間』のやることです。私はこれがデモクラシーだと思うのです。」(「世直し大観」世界2007年12月号 遺稿・絶筆)

この原稿は病室で口述しテープに入れ、それを家族が書き起こして文字にするという形で書かれたものだ。幸運にもこの場面を撮影することが出来た。小田さんが人生の同行者とよぶ妻の玄順恵さんが日曜日の朝電話をくださった。「今日は調子がよくて朝からテープの吹き込みをしていますよ。撮影にこられますか」というものだった。カメラマンに連絡する間もなく私はミニHDカムを持ってタクシーに乗った。撮影した部分がまさか遺稿の最後のフレーズだったとは雑誌が出版されるまで知らなかった。絶筆となった原稿の最後を撮影できたことは光栄だったし、テレビのドキュメンタリーを撮ってきた者として、嬉しいことだった。

大学と、大学院で古代ギリシャ文学を学

んだ小田さんは、民主主義「デモス・クラトス」発祥の地ギリシャにこだわり続け、いつもそこへ立ち戻った。古代ギリシャの詩人ホメロスの長編叙事詩「イリアス」の翻訳も進行中だった。遺品の中から見つかった「何でも見てやろう」のもとになった小さな手帳に小田さんは書いている。「陽光かがやくアクロポリスを見ている。遂にギリシャにきたのである。背後はこれも又陽光にきらめく地中海である。アクロポリスがこれほどまでに美しい、すくなくともINPRESSINGであるとは思わなかった。感無量である」小田さんは27歳だった。



「何でも見てやろう」旅行中のメモ

75年の生涯、世界中を旅した小田さん最後の旅はギリシャ文明発祥の地、トロイの遺跡だった。帰国して末期がんが発見されたのは、わずか1週間後のことだ。

小田さんの遺骨は来春エーゲ海に散骨される。小田さんの遺言だった。

「終わらない旅」は続く

「アップ、今何を考えているの」

「おまえが大きくなったとき世界はどう

なっているか、考えているんだよ」

「で、どうなっているの、世界は」(「でもくらていあ」)

今はすでに大学4年生となった長女ならさんが幼稚園児のときの会話だった。小田さんのお連れ合いは在日朝鮮人で娘さんは朝鮮語で父親をアップと呼ぶ。

私はこの会話が好きて、小田さんの病室でもお二人のいるところで話題にした。ならさんとは彼女が中学生の頃、伯母上を訪問する北朝鮮への旅に一緒にしたこともあり、彼女の成長を楽しみに見守ってきた者のひとりだ。

小田さん最後の小説「終わらない旅」(新潮社)は病気がわかる4ヶ月前に出版された。小田さん75年の人生すべてが語られている作品だが、主人公は次の世代の女性とベトナム戦争に参加した父を持つアメリカ女性だ。鶴見俊輔さんとおぼしき「哲学者」も登場する。小田さんのアメリカの友人たち、ベトナム戦争の脱走兵たち、一緒に活動したあまたの仲間たちが登場し、舞台はアメリカ、ベトナム、日本とインターナショナルだ。しかし、小田さんとおぼしき大学の英語教師は震災で死に、「哲学者」も小説の中ではすでに無い。物語は娘たちによって展開していく。

5年をかけて書き下ろされた大作だが執筆最後の頃、小田さんはすでに食欲がなく体調はすぐれなかったということだ。「もし、病院へ行き治療や入院などということをご告げられたら、この作品を書き続けることができないということをご本人は分かっ

いたのだと思います」と玄順恵さんは言う。「久美子、お前が私と同じように考えてくれるかどうか、また考えてくれと頼んでいるのでもない。お前はお前の思うとおり、考えていけばよい。しかし、私のような体験を持てば、間違いなく、お前も同じようなことを考えて生きていくだろうと、私は思うね。信じるね。信じたいね。こんなことをいまさら言うのは、大げさで、私に似つかわしくないが、私のベトナム反戦の原点は、間違いなく私の体験に基づく、戦争はどんな戦争も間違っている、の信念だろう」(「終わらない旅」)

自分の生涯を作品として残し、読んでもらいたかったのはなによりも今はたくましく成長したご自身の娘ならさんだったに違いない。「いずれにせよ自分たち小さな人間の旅は、まだまだ終わらずにつづくのだと久美子は思った」「終わらない旅」は小田さんの次世代へのバトンタッチだった。



小田美実さん 2006年